念を有し優勝なる宣教師の如く此信念の下に奮鬪すべきものであつて古來優勝なる教育家は多くは此種の人物であると思ふのである。

リッケルトの歴史學の觀念に就て

安部晴之助

從來經驗科學を分類して、自然科學と精神科學とに別けるのが普通であつたが、獨逸西南派は此の分類法の無意味な事を指摘して、之に代ふるに自然科學と歴史學との分類法を以てした。從來の分類法は主として學問の對象の差別に基いたものであつたが、學問の對象の差別からして學問其者の性質に差別は生じない。故に學問の分類は寧ろ其の目的、方法の差別に依るべきである、と。是れが此派の根本思想であつて、之を詳論したのは、リッケルトである。氏の說は既に屢々世に紹介せられたから、玆に之を反覆する事はしないけれども、行論の順序として、必要な點だけを極めて簡單に次に摘錄する事とする。

一般に經驗科學は吾人が日常經驗する現實の世界を捕捉する事を其の職能とする。然るに、現實の世界は、其の外延に於ても亦其の內包に於ても無限の雜多である。此の無限の世界を吾人の有限の精神が捕捉するが爲には、吾人の精神は一定の方法に依つて現實を變形し、其の雜多性を克服しなければならぬ。卽ち吾人は概念に依つて現實を一般化し、其の雜多を統一するのである。是れ則ち自然科學的方法である。從つて自然科學的世界

は常に一般性に於て捕捉せられし「自然」であつて、此の「自然」に於ては現實の個性、特殊性は常に看過せられる。故に玆に自然科學の越ゆべからざる限界が存する。卽ち個性は自然科學の研究の對象とはなり得ざるものである。されば個性を研究する爲には、自然科學の外に、此と其の方法を異にする別種の學問が存在しなければならぬ。是れ則ち歷史學である。尤も歷史學は無限の個物を總て其の研究の對象とする事は出來ないから、吾人は之を價値に關係せしめて撰擇を施し、初めて眞の個性として歷史學の對象とするといふのである。

此の說に就ては種々の方面より種々の批難が現れ得るのであるが、今、問題の範圍を主として歷史學の方面に限定して見ると、此點に就て現れ得べき主要なる批難は、個性の研究としての歷史學の觀念に反對するものと、歷史的概念構成の方法に就て反對するものとの二つであらうと思ふ。前者は氏の分類法に根本的に反對するものであつて、積極的には歷史も亦、普遍的法則の研究なりとし消極的には氏の所謂、個性は認識(概念的)の對象に非ずとするものである。後者は個性研究としての歷史學の觀念には同意するのであるが、夫れが個性を選擇し、且つ其の發展を考る處の價値關係の方法に對し不同意を唱へるのである。此の兩者は多く現存の歷史研究に憑據してリッケルトに加へられる批難であるが、此の點よりして氏の方法論上の論據を破る事は不可能である。殊に前の批難に對しては氏は周到なる注意を以て豫め之に答へて居るのであるから(Grenzen d. naturwissenschaftlichen Begriffsbildung; Kap. 4. IV etc.; Kap. 4. II)暫くかの解答を以て滿足する事とする。後の批難に就ては、氏の說明は稍不滿足なるを免れないと思ふけれども、問題があまり複雜になるから

茲には此の點に觸れない事とする。

然るに茲に今一つ問題が存する。氏の說によれば、一般的研究が自然科學であるに對し、個性或は特殊性の研究は卽ち歷史學であつて、個性化の見方と歷史的見方とは全々同一なりとせられて居る。氏は常に之を自明の事として取扱つて居るやうであるが、實際はしかく自明の事でない。個性的と歷史的とは全く別個の概念である。されば個性的研究が何故に卽、歷史的研究たらざるべからざるか、吾人は了解に苦しむのである。個性は勿論歷史學に於ても研究せられるけれども、唯だ歷史學に依つてのみ研究せらるべしといふ何等の理由がない。吾人は歷史學以外の種々の見方に依つて特殊性を認識し得る。例へば吾人が少年時代に習つた地理學の如きは明に特殊性の研究であつた。卽ち其は世界の各國、各地、山川、都市等の特性を記述したものであつた。之は世界各國の歷史、學術、文藝史、宗敎、道德史、及び個人の傳記の如きものと其の特殊性の研究たる點に於て何等の逕庭がない。又外國語の學習（言語學や文法學でない）の如きも、若し語學と稱する事を許容するならば、特殊的研究に屬すべきものであらう。されば歷史學以外にも特殊的研究と目すべきものは數多ある。歷史學のみが唯一の特殊的研究では決してない。尤も一般人類に取つて個物として重大なる價値關係を有するものは少いから、特殊を研究する學問は寧ろ少いかも知れない。又幾干存在するとしても其の研究の方法が未だ確定せず、從つて學問としての體裁に於て缺くる處あるかも知れないが、兎に角、右の如き特殊性の研究を目的とする學問が存在するとすれば、歷史學のみが獨り特殊的研究の學たる地位を獨占することは出來ぬ。尤も諸他の特殊的研究に比較すれば、歷史學は疑もなく最も重要なるものであらう。之

と對照すれば諸他の特殊的研究は甚だ價値の乏しいものであるかも知れない。然し歴史的見方が諸他の特殊的見方を統括するが如き（恰も物理學が諸他の特殊科學を統括するが如き）關係に立たざる以上は、歴史的見方は諸他の特殊的見方と對當の位地に立つのであつて、此等は皆、互に獨立した特殊化の見方である。リッケルトが此等の見方を全く無視して、特殊性の研究卽ち歴史的研究なりとするのは、あまり性急な不當の推論ではないか。

歴史的研究が非常に尊重せられる今日、斯の如き批難を與る事は、あまりに學問の形式に拘泥した議論であつて、歴史の外に有力なる特殊的研究の存在しないだけ、此の缺點は大した實質上の缺點とはならないやうに見ゆるかも知れぬが、研究の問題が學問の形式的方法に關するものなる以上飽迄形式を尊重するのは當然である。のみならずリッケルトは此の點を看過したが爲に、其の思想展開の上に非常な不便を被つて居る。例ば氏の所謂自然科學に於ける相對的歴史的部分の解釋の如き之である。吾人が類概念を以て呼ぶ處のものは其の類に共通なる性質を表す點に於て明に自然科學の研究の對象である。然し類概念は他の類概念と區別せられる點に於て又其の個性を有する。されば特殊の自然科學は類概念を以て表はされたる特殊の對象の研究たる以上、普通性の研究たると共に又特殊性の研究である。此の點より見れば、所謂自然科學の殆んど全體は又特殊的研究なりと見做し得る。尤も自然科學中には純粹物理學の如き普遍性の大なるものより、經驗物理學、化學、生物學、生理學等の如き特殊性の大なるものに至る迄、種々特殊性の程度の差違はあるけれども純粹に普遍的なる（但し後段參照）純粹物理學を除きては、他は皆多少の程度に於て特殊性を有し、從

つて相對的の特殊的研究なりと見做し得る。然るにリッケルトは特殊的研究と歴史的研究とを等置した結果、此等の特殊科學に於ては、唯其の特殊性の歴史的解釋のみを以て相對的特殊的研究なりとするが如き窮屈なる説明を與るの止むを得ざるに至つた。而して例へば光り、音響、電磁現象の如き物理的現象にも、其の成立、變化、發展を研究する歴史的部分が存在し得る(論理的に)事を主張して居る。此の主張の當否は暫く措くも、光りや音響の歴史的研究といふが如きは餘程奇怪に感ぜられる。加之、斯の如き研究のみを以て光りや音響の特殊的研究と解する事は、甚だ窮屈な考であるといはなければならぬ。

然し更に一層大なる難點は、彼が特殊的研究と歴史學とを等置した結果、一般的見方と特殊的見方、「自然界」と「現實界」、自然科學的世界觀と歴史的世界觀との統一を考る事が不可能となつた事である。云ふ迄もなく、自然科學的見方と歴史的見方とは、吾人が現實を捕捉する方法として互に相補足するものである。然し相互補助といふ事だけでは未だ兩者の統一は附かない。兩種の見方は依然二個の互に獨立な、寧ろ敵對的な認識の方法である。(op. cit. Kap 4. VIII)或は自然科學的方法も歴史的方法も、其の共通の根本的假定として絶對的普遍的價値觀念に指導せらるゝとしても(Kap 5. V)未だ普遍化の方法と個性化の方法との有機的統一とはならぬ。氏は自然科學的方法と歴史的方法との分化に於ては比較的成効したけれども、其の合化(Integration)には全然失敗して居る。併し今、若し個性的研究卽歴史的研究なりとする偏狹な態度を捨てゝ、一般の個性的研究を以て、自然科學の普遍的研究に對立せしむるならば、此の問題は必ずしも不可解な問題ではなからうと思はれる。言ふ迄もなく、普遍と特殊とは相

對的の概念である。單に論理的概念として其の一方を保有して他を捨離する事が不可能なるのみならず、吾人の具體的認識に於ても亦其の一方を捨てる事は出來ぬ。例へば自然料學の普通的認識は決して特殊の現實を離れる事は出來ないので、若し萬一特殊を全く捨て去るならば、其は現實を捕捉する自然科學とはならぬ。既に現實を離れずとすれば其の普遍は常に特殊の規定と沒交渉である事は出來ぬ。科學は特殊を離れるのではなくて、特殊の中に普遍を求め、特殊を其の普遍の特殊態として見るに過ぎぬ。現にリッケルト自身が(op. cit. 89ff.)說くが如く雜多の世界を一般的なる根本的物體の一定の數學的規定として見る事が自然科學の理想である。其の一般者は常に特殊の規定を離れない事を忘れてはならない。之に反して歷史的認識の理想を見れば其は決して一般性と沒交渉ではなくて、其の特殊性は又一般的概念の特殊の結合或は規定たるに過ぎぬ。以上は普遍化と個性化の兩極端に就て特殊と普遍との結合を示すものであるが、此等兩極端の中間に位する所謂相對的歷史的(或は自然的)なるものに於て、普遍と特殊の相結合せる事は勿論の事である。かく吾人の認識が常に特殊性の認識と普遍性の認識とを結合せりとすると、自然科學的見方と特殊化の見方(歷史は其の一部をなす處の)とは二個の認識の方法ではなくて元來一個の具體的認識作用であると考へなければならぬ。而して此の一個の認識作用を吾人が抽象して二個の見方と考ふるに過ぎぬ。故に孰れの學問でも其の成果に就て考ふれば、普遍的認識とも見られるし又個性的認識とも見られる。併し吾人の學問研究の態度より見れば、或は個性の認識を目的として居る時もあらうし又普遍性の認識を目的として居る時もあるのは事實であるから、リッケルトが學問の目的及び方法の上よ

り普遍的の見方と特殊的の見方とを區別したのは正當であるが、實際に營まれた認識は普遍的認識でもあり、又特殊的認識でもある。斯の如く見來れば、自然科學的見方と特殊的見方との統一がつき、同時にリッケルトの主張する此の兩者の區別を認容し得るのみならず、氏の所謂兩種の方法の相互補足の意味が一層明確となるであらうと思ふ。同時に又上に掲げた批難の一つであつた、歷史は普遍的法則の認識なりとする說とも握手する事が出來る。何となれば歷史學の成果が普遍的認識を包含するといふ事は、歷史學の目的が特殊の認識に存するといふ事と、少しも矛盾する處はないからである。又今一つの批難であつた吾人の認識は普遍的概念に依るが爲に特殊性を認識し難しといふ主張に對しても容易く答る事が出來る。即ち概念的認識は個性の認識とは決して相容れざるものではなくて、普遍的要素の特殊の規定或は結合が即ち特殊の識認であると。かくて個性の認識の可能は遺憾なく立せられるであらう。

之を要するにリッカートが個性的研究即ち歷史的研究なりとする non lequitur を止めて、歷史學以外の個性的研究の爲に其の成立の餘地を殘し、歷史學には唯た其中の一科の學たるの位地を與へて滿足するならば、一般性の研究と特殊性の研究との統一が可能となり、同時に上掲の一二の批難をも併せ免れる事が出來るではあるまいか。

リッケルトの說に就ては上掲の書第一版を參照したに止る。新版や Kulturw. u. Naturw. を步獵するの暇がなかつた事を斷つておく。若し此等の著に異つた見解があるとすれば妄言の罪は甘んじて受ける。